# フランス国立パリ聾学校との交流

鈴木　淳一

近年、経済活動、平和維持活動、環境問題など、様々な問題に対してグローバルな視点で考え、解決していかなければならない状況が急速に進展している。このような社会を生きていく生徒たちにとって、実際に異文化・文明に属する人々と接触し、多様な倫理観や価値観があることを知ることは大変重要なことと考えられる。本校では、2003 年にフランス国立パリ聾学校と姉妹校になって以来、研究協力や、生徒による文通などを行いながら互いに信頼関係を深めてきた。そして 10 年の時を経て、2013 年 12 月、国際教育交流が実現した。本研究では、本校から選抜された 10 名の高等部生徒がパリ聾学校を訪問し、交流した様子と成果について報告したい。

【キーワード】　国際教育交流　コミュニケーション　多様な倫理観や価値観

## １　はじめに

### （1）国際教育交流の意義

今日、情報通信技術の発展や、市場の国際的開放などにより、人材、物材、情報などの国際的移動が活性化しており、このようなグローバル化は、今後ますます加速していくことは間違いないことであると思われる。したがって、各学校では、国際教育を推進し、グローバル化に対応できる人材の育成に努めなければならない。

また、筑波大学附属学校では、「社会の要請に基づく、国際的視野をもった基礎学力の修得や生涯学習体系の基礎モデルとなる先導的な初等・中等教育拠点を形成する」ことを中期目標のひとつとしており、そのため、将来構想の基本方針として、三つの拠点構想（先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点）を定め、それに基づいて様々な教育・研究活動を行っている。

以上のことから、本校では様々な内容、方法で国際教育を行ってきているが、その中で、実際に外国の人や文化とふれあうことができる国際教育交流は、やはり重要な位置づけにしていく必要があると考えている。

本校では、フランス国立パリ聾学校（以下、パリ聾学校）と姉妹校提携を結び(2003 年)、今回の交流に至るまで準備を進めてきた。

### （2）姉妹校提携から交流へ

先に述べたとおり、本校では、パリ聾学校と姉妹校提携を結び、その後、本校教員が第 1 回目の視察（2011 年 12 月）を行うために渡仏し、続いてパリ聾学校からも視察団が来校し（2012 年 7 月）、交流の目的や内容について確認した。また、さらに交流の期日や内容・方法、見学地など、交流の具体的な内容を検討するために第 2 回目の視察を行った（2013 年 1 月）。

以上のような準備を経て、第 1 回目の交流が行われることとなった（2013 年 12 月）。

第 1 回目の交流は、本校の高等部（普通科、専攻科）の生徒 10 名が参加することになった。

### （3）交流期間・参加者

①期間‥2013 年 12 月 11 日～16 日（4 泊 6 日）

②参加生徒‥高等部普通科(6 名)、専攻科(造形芸術科 2 名、歯科技工科 2 名)、計 10 名

③引率教員‥4 名

### （4）パリ聾学校について

パリ聾学校は、世界で最初に創設された聾学校であり、200 年以上の歴史を持っている。(1760 年ド・レペ神父が学校を創立し、1791 年に国立化された。)

現在のパリ聾学校は、校内（中学校、職業高校）で行う教育だけでなく、提携する幼稚園、小学校、中学校、高等学校に対してパリ聾学校の教員が支援する形をとる教育も行われている。

フランスの高等学校は、大学を目指すための普通高校、工業の専門知識を身につけるための工業高校、その他専門知識を身につけるための職業高校があるが、パリ聾学校は、このうちの職業高校にあたり、8 つの職業科が設置されている。{園芸科、被服科、美容科、錠前・金属加工科、衛生設備科(配管工など)、建築科、グラフィックデザイン科、歯科技工科}

## 2　交流の主な内容・方法

### （1）事前学習

まず、参加生徒 10 名、引率職員 4 名が集まり、日程や交流の内容、方法について確認した。

ここで、フランス旅行中の危機管理について考える機会を設けることはとても重要である。今回は、地下鉄やホテル、美術館、レストランでの荷物の持ち方などについて、具体的な事例を挙げて対処法を考えるようにした。

また、交流会に参加する生徒が、フランスの歴史や文化について各自テーマを設定し、調べ学習を行い、資料としてまとめた。

どの生徒も、フランス王室、パリの美術館、パリ聾学校の歴史、パリの建造物など、自分の興味のある事柄についてよく調べることができた。**図 1** はある生徒がマリー・アントワネットについてまとめた資料の冒頭部分である。（実際には写真を挿入するなどの工夫をしている。）

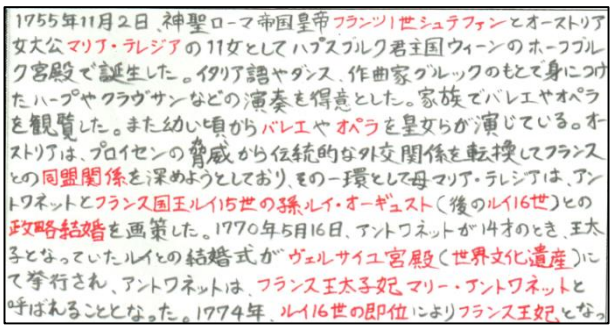
1755年11月2日、神聖ローマ帝国皇帝フランツ1世シュテファンとオーストリア女大公マリア・テレジアの11女としてハプスブルク君主国ウィーンのホーフブルク宮殿で誕生した。イタリア語やダンス、作曲家グルックのもとで身につけたハープやクラヴサンなどの演奏を得意とした。家族でバレエやオペラを観賞した。また幼い頃からバレエやオペラを皇女らが演じている。オーストリアは、プロイセンの脅威から伝統的な外交関係を転換してフランスとの同盟関係を深めようとしており、その一環として母マリア・テレジアは、アントワネットとフランス国王ルイ15世の孫ルイ・オーギュスト（後のルイ16世）との政略結婚を画策した。1770年5月16日、アントワネットが14才のとき、王太子となっていたルイとの結婚式がヴェルサイユ宮殿（世界文化遺産）にて挙行され、アントワネットは、フランス王太子妃マリー・アントワネットと呼ばれることとなった。1774年、ルイ16世の即位によりフランス王妃となっ

**図 1　事前学習資料（例）**

### （2）交流の内容

主な交流の内容は以下の通りである。（①～③は、1～2 日目、④は 3 日目に行った。）

①職業科の見学

②英語、体育による共同学習

③昼食時間などの自由な形の交流

④パリ市内観光

### （3）事後学習

①感想文の作成

②報告会の実施

プレゼンテーションソフトを利用し、交流参加者が学年の生徒たちに向けて活動報告をした。

## 3　交流の様子

### （1）職業科の見学

各職業科を見学した。そこでは、担当教員や生徒からの概要説明があった。通訳の方法は、パリ聾学校の生徒が話をする場合、「パリ聾学校の生徒の手話を読み取ってフランス語に訳す（パリ聾学校の教員）→フランス語を日本語に訳す（日本人スタッフ）→日本語を手話通訳する（本校教員）」という形である。（**図 2**…向かって左から、本校教員、パリ聾学校の教員、日本人スタッフ）

**図２　通訳の様子**

本校の生徒たちは、職業科を見学して、その学習内容がフランスの環境や文化と密接な関係があるということに気づいたようである。生徒から「金属加工科で作られているベランダや門扉がとても芸術性豊かであったが、確かに町並みを見るとどの建物にもそのような装飾が施されており、フランスの文化を支える重要なものであることが分かった。」という感想や、「配管工の仕事がそんなにたくさんあるのか疑問だったが、フランスには古い建物がたくさん残っているため配管修理の需要が多いと聞き、なるほどと思った。」といった感想が聞かれた。

また、歯科技工科は本校高等部専攻科にも設置されている学科であり、今回の交流で参加した２名の生徒は機材や備品の質問などを積極的に行っていた。また、事前に作成した本校専攻科の紹介ＶＴＲ（生徒の自己紹介などにフランス語の字幕がついている）を放映することができた。今後歯科技工科同士で交流をしていくきっかけにもしていきたいところである。

**図３　歯科技工科の見学の様子**

本校の生徒たちは、「パリ聾学校職業科の生徒たちは、高い目的意識を持って学んでいる。」と感じたようである。将来の職業に対する意識が明確で、そのことを具体的に語る姿が印象に残ったようだ。

### （２）英語、体育の共同学習

パリ聾学校でも英語の授業があるが、今回特別に英語の共同学習を行った。例えば、パリ聾学校の生徒が英語で「日本で人気のあるスポーツは何か」という質問を板書すると、本校生徒がその答えを英語で板書するといった内容である。互いの意思が通じ合ったとき、「やはり英語は世界共通語なんだ」と、どの生徒も思ったようである。また、以上のようなやりとりを続けるうちに、自然と「その言葉はあなたの国ではどう手話表現するのか」という話題になり、互いに手話表現しながら、手話の違いや似ているところなどを発見するという活動になっていった。この段階になると、教員のサポートが不要になるほどであった。

**図４　英語の授業の様子**

体育では、バドミントン、卓球を共にプレーした。好プレーをたたえ合ったり、思いもよらぬ珍プレーに大きな笑いが起こったりし、スポーツには人の心と心をつなぐ大きな力があることを改めて感じたようだった。

**図５　体育の授業の様子**

今回の、英語や体育の共同学習では、共通の目的を持って学習を作り上げていく交流ができたと思う。そしてこのような形の交流は、自然とコミュニケーションの必然性が生まれ、積極的になれるようであった。

### （３）昼食時間などの自由な形の交流

昼食はパリ聾学校の食堂で摂ることになった。食事をする内に、本校の生徒の周りにパリ聾学校の生徒が集まり、楽しい雰囲気の中でコミュニケーションができたようだった。母国語は違っても、お互いに「伝えたい」という気持ちがあると、通じ合う方法が必ず見つかるもののようである。例えば、互いに英語を活用して思いついた言葉をメモに書いて伝え、その言葉について日本語、フランス語での書き方を教え合い、さらにその言葉について互いの国の手話を教え合う、といったやりとりが見られた。

**図６　昼食の様子**

このような、自由な形の交流は、ある程度の交流の経験や、多様なコミュニケーション手段の知識、積極性などが必要な、難しいものであると思う。確かに、はじめのうちは、どことなくぎこちない様子も見られた。しかし、数人の生徒がコミュニケーションをとり始めると、周りの生徒がその様子を見て触発され、コミュニケーションの方法などを参考にし、気がつくとほとんどの生徒が交流を始めていたのである。その根底には、どの生徒も交流をしたいという願望があるわけであり、そのような心を育てる教育の大切さというものを、改めて感じさせられた。

### （４）パリ市内観光

交流 3 日目は、パリ聾学校の生徒 4 名、教員 1 名と共に、パリ市内観光（モンマルトルの丘、プティ・パレ美術館、凱旋門、エッフェル塔、他）を行った。

このような環境で行う交流は、教室の中で行われる場合とは違い、メモ帳の利用など、文字によるコミュニケーションがとりにくい状況ではある。しかし、コミュニケーションの基となる題材を次々と見つけることができるのは、このような形の交流の利点であろう。

実際生徒たちは、モンマルトルの丘から景色を眺めながら、「太陽」「月」「空」などの手話を互いに紹介し合ったりしながら、コミュニケーションを深めていくことができていたのである。このような時間を過ごすことで、目に映ったもの、仲間と語ったことが、印象深く心に残ったのではないかと思う。

**図７　美術館内での会話の様子**

４日目は、パリ聾学校の生徒と教員は同行せず、本校の生徒と教員、そしてツアーガイドという構成でパリ市内観光（ルーブル美術館、エッフェル塔、ノートルダム寺院、他）を行った。

この日は、パリ聾学校の生徒と関わる時間は持てなかったが、フランスの文化や価値観について、じっくりと感じ取り、考える時間が持てたことは大きな収穫となった。

今後、パリ聾学校の生徒たちが、自国にある美術品や建造物などに対してどのように考えているのか知る機会をつくり、自分（本校生徒）の印象・考えと比較してみるのも良い勉強になるのではないだろうか。

**図８　ノートルダム寺院の前にて**

## ５　成果と課題（事後学習の様子を検証して）

帰国後、生徒たちは、事後学習として今回の交流の感想文を作成した。以下に、感想をいくつか紹介したい。

「交流が始まったばかりの時はとても緊張し、ただ必死にコミュニケーションをしているという感じであった。しかし、あきらめずに関わり続ければ必ず分かり合えるのだと思った。また、今になって振り返ってみると、国語と英語、手話の力が大きいと感じた。国語で物事を考え、英語で伝え合い、手話で心と心がつながったように思う。」

これは、自分が学習してきたことが、新しい環境で生かされたことを実感できたわけであり、今後の学習意欲の向上、また自分の将来を考えて自立しようとする意識につながると考えられる。

また、次のような感想もあった。「フランスの文化を学べたと同時に、日本についても今までと違った目で見えるようになった。これからは（日本の環境や文化について）当たり前だと思わずに、なぜそうなったのか考えるようにしたい。」

このように、自分を取り巻く環境や、自分自身について、客観視することの大切さが学べたということは、とても大きな意義があると考えられる。

また、プレゼンテーションソフトを活用して、同学年の仲間の前で発表会を行った。以下に、いくつか例を示したい。

**図９**のように、パリ聾学校やパリの美術館、建造物、街並みなどについては、どの生徒もきちんと説明がなされていた。

**図９　プレゼンテーションの例（1）**

図 10 のようにパリ聾学校の生徒との交流で学んだこと、図 11 のように今回の国際交流を総括して感じたことなどを、どの生徒も熱く語る様子が見られた。

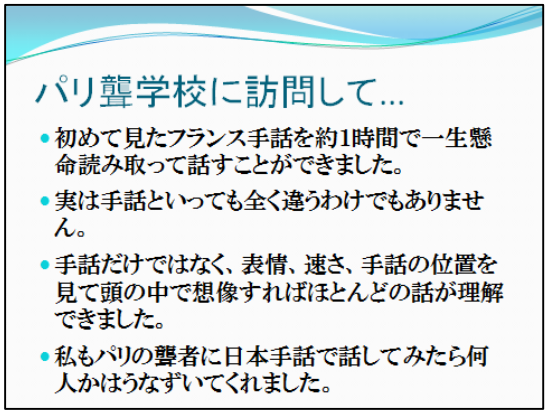


**図 10　プレゼンテーションの例 (2)**

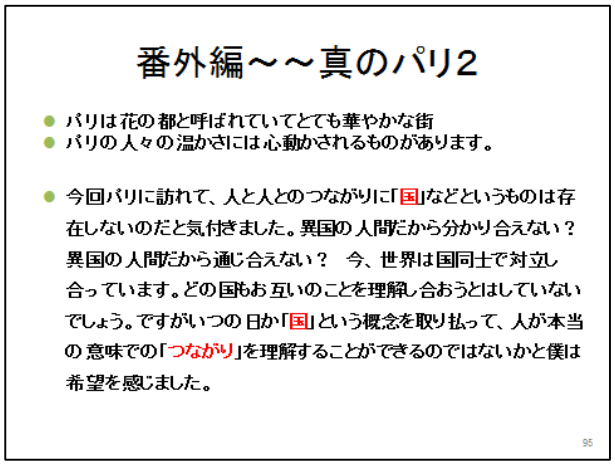


**図 11　プレゼンテーションの例 (3)**

今回の交流では、どの生徒も、何とか伝えたい、わかり合いたいという強い気持ちを持ち、持っている知識や技能（身振り・手振り、筆談、手話、英語など）を積極的に活用していけば、異国の生徒たちとも通じ合うことができるのではないか、ということに気づき、感動を覚えている。そして、その感動を人にも伝えたいという気持ちが、帰国後の感想文や報告会に表れている。また、さらに親や友達、教師への感謝の言葉が素直に表現されている。このことは、確かに大きな成果であったと思われる。

今後もパリ聾学校との交流は継続していくことになるが、今後は、より計画的、系統的に行い、さらに教育的な成果を挙げていく必要がある。例えば、本校生徒とパリ聾学校の生徒が、地球環境問題についてディスカッションをするといった交流に発展させることも考えられる。しかし、その際は、言語やコミュニケーション手段、情報保障などの問題を十分検討しなければならない。

## ６　終わりに

帰国してから約半年後（今年度の 4 月）、パリ聾学校の生徒 5 名（引率教員は 2 名）が来校し、本校の幼稚部から高等部まで全校的に交流を行った。そのときには、昨年度 12 月にパリ聾学校を訪問して得た知識や経験が生き、充実した交流を行うことができた。特に、渡仏した 10 名の生徒は、リーダーシップをとって交流を牽引していた。

次回は、参加生徒は異なるが、再度本校からパリ聾学校を訪問することになっている。さらに充実した交流にし、双方の絆を深めていきたい。

〔参考文献〕

・文部科学省（2009）国際教育交流政策懇談会(第 1 回)配付資料
・筑波大学　附属学校教育局
http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/?page_id=97